

一つの願い

一万田 尚登<いちまだ ひさと>

(国際基督教大学建設後援会会長、当時日本銀行総裁)

このごろ私はひそかに、こんな願いをもっている。それは一日一回、わずか一分か二分でいい、平和な美しい鐘の音を全国民にきかせたいということだ。いま国民の生活は苦しく、人々はいかにして生きるかに焦心している。いわば頭は上り身は爪先で立っているというまことに悲しい不安定の姿である。よき政治がこの生活の悪条件を改善しなければならぬことはいうまでもないが、しかしそれかといってまた人々が自らを助ける努力を怠っていいという法はない。自らを助ける努力—私はそれをこの鐘の音による反省の中に求めたいと思っている。銀行への通勤の朝夕、私はよく霊南坂教会の鐘の音をきく。それは静かな、心をすませてくれるような美しい音色であって、それをきくたびに黙想するのが常である。そしてその黙想の中でいつも私の頭を去来するのは戦いに敗れた後の日本、とくにその経済の行く手ということだ。だれでも知っているように、日本経済の将来は輸出産業の中心として貿易によって膨大な人口を養う以外に方法はない。それにはしかし日本の商品が世界に愛せられねばならぬ。これはまた日本人が世界の人々に愛せられることに発し、それに通ずる。だが、現在のように、国民全体が血眼になって落ち着かない姿でいて、それで果たして世界の人々に愛されるだろうか。私は美しい鐘の音をききながら思う。今のわれわれは一日一回、頭をたれて今日なにをしたか、それでよいかと、自省する時をもつことが必要ではないだろうかそれも心から自然に出る姿が望ましい。その音だけきいてもほれぼれするような音楽的な鐘の音。それが一日一回全国に静かに鳴りわたり、八千万の国民が一瞬だけでも頭をたれることになれば、それは日本の再建に、また個人の成長にどんなによい影響を与えることだろうか。デモクラシーの礎もこの辺にないであろうか

国際基督教大学建設通信 第一号 (昭和24年2月1日) より抜粋。